

## 新批判主義の社會哲學（フォルレンダー）

五十嵐 信 譯

### 五、シュタウディングー

#### 一、倫理と政治

シュタムラー及びアトルプの著書は、主として學問的なものであり理想主義的社會主義をば方法的體系的に基礎づけようとして居るものであるが、フランツ・シュタウディングーの「倫理と政治」(Ethische und Politische, Berlin 1899, VI und 162S.)は、學問的目的を持つと同時に、『道德的生活の革新がただそれに基づいてのみ可能であるところの物質的並びに道德的基礎』をば同時代の人々に指示しよう(序言三頁)、と云ふ實際的目的をも持つて居るものである。従つて、第一部に於いて見出された社會的倫理學の諸原理を今日の社會に適用して居るところの第二部に於いては、また當代の或る倫理的並びに政治的諸方針 (die Nationalsoziale, die Bodenreformer, die Gesellschaft für ethnische Kultur, 殊に、die deutsche Sozialdemokratie) が特質づけられ批判せられて居る。併し、著書の様式は異つて

居ても、その精神は同一である。即ち、最後の基礎はシュタウディングガーにあつても、カントの目的の國の思想であり、現代の社會主義は、彼の見るところによれば、その核心は既に舊約の預言及びイエスの教説によつて示されて居るところの思想の發展に外ならない。シュタウディングガーは、他の人々よりもなほ一層公然且つ斷然と社會主義の側に立つて居るのであるが、併し、彼は、また、これを學問的に首尾一貫せるものたらしめやうとして、等しく斷然と、社會主義は、『統一的認識及び統一的理性的意欲の原理』をば意識的に基礎として居なければならぬ、と主張して居る。『コーヘン・ナトルプ・シュタムラー等』——シュタウディングガーは謙遜して自己の名を擧げることをして居る<sup>31)</sup>——』によつて發展させられて居るやうな、カントによる倫理學的分析的確立は、マルクス—エンゲルス派の主として歴史的因果的な確立に對する、**不可缺的補充**を成す。』(序言四頁)と云ふのである。

シュタウディングガーは、外面的にはあまりカントに依存せず寧ろ時々(四五頁、六五頁註)カントに反對して居るが、併し、彼も、また、全然、我々にとつては周知の批判的方法に於いて、因果的考察 (kausale Betrachtung) と目的考察 (Zweck-Betrachtung) とが意味を異にする所以を説いて居る。

この考察法に未だ習熟して居ない人々は、凡ゆる領域から多くの例を引き來つてその趣旨を明かならしめて居る、彼の平易な説き方によつて、それを會得せられるであらう。『正(眞)』及び『偽』

の概念と同じく、『善』及び『惡』のそれもそれ自體に於いては、因果的生成と無關係である。而して、純粹な科學が問題とするのは、一切の認識の内容ではなくて、その合致 (Einheitlichkeit) である。『命題は、それが一切の認識の關聯の中に一義的に嵌入せられる時のみ、眞なのである。』(一七頁) これは、全く、カントの『經驗の形式的統一』に照應して居る。而して、行動或ひは意志は、それが一切の (生活一切の目的) の關聯の中に統一的に嵌入せられる限りに於いて、而して、然せられるが故に、善である。』(三九頁) これは、別な形に於ける、カントの形式的道德法則である。『かくて、眞の道德の原理は、平等の權利を有する人々の間に於ける人間的思考・意欲・行動の統一の原理である。』これは、また、神の國の理念として (かくて、カントの意味に於いて) 基督敎の根柢に横はつて居るところの原理と、同一である。ただ、これは、今や、『その內的諸制約に於いて認識せられ展開せられ』、『彼岸の雲霧から人類の生活に於ける一の動力に高められ』て居る (三九頁)。この意味に於いて、我々の全本質が渴望するところのかの統一は、『我々にとり實際に神である。』(四三頁) 何となれば、善とは、我々の思考及び意欲の最高の照準點だからである。「私は、シュタウディングガーが、何故に、四三頁の註に於いて、ナトルプの全く同じ意味に用ゐられて居る『無制約的なるもの』 (das Unbedingte) と云ふ言葉を排斥して居るか、を、了解し得ない。『無制約的なるもの』は、ナトルプにあつても、勿論、經驗から初めてその内容を受取るのである。」シユ

タウデンガーは、道德的或ひは一層明確に云ふならば社會倫理的理想をば、實質的にはナトルプ及びシュタムラーと全く一致して、『自由であり平等の權利を有する人々によつて創造せらるべき、認識・目的秩序・意志に於ける實際的共同體生活の統一』(六六・六七頁)として、また後には(八一頁・八四頁)シュタムラーの言葉そのままに、『自由に意欲する人間の共同體』として、規定して居る。

この理想から、一切の共同體倫理 (Gemeinschaftsethik) が生起する。これに反し、この統一を求める努力が鈍ることは、手段を目的の上に置く一切の暴力倫理 (Gewaltethik) —— 狂熱的黨派心・獨斷的抑壓慾・露骨な獲利策、更に、『惡魔の如き』虛構及び偽善としての——の根源である。この暴力倫理に對しては、倫理的、政治の任務、即ち、與へられた歴史的に生成せる秩序をばかの社會倫理的究極目的に向つて合理的に發育せしめることは、閉ざれて居る。倫理的政治の手段は、認識 (Erkenntnis) の體制 (Organisation) とである(八〇頁)。大衆の朦朧たる意識・多かれ少かれ空想的な目標に向つて居る彼らの盲目的な感情急迫は、明瞭な認識・目的を意識せる意欲・體制を具へた行動に純化しなければならない。

尤も、一切の倫理は、社會の道德的革新のための歴史的諸條件を缺くや否や、無力となる。『マックス・アウレリウスの最も美しき諸原理も、ローマを破滅から救ひ得なかつた。これは、それらが大衆運動の生きた動力として現れなかつたからである。』(八〇頁) 併し、シュタウデンガーの見



るところによれば、現代の勞働者運動に於いては、倫理的原理が生きた動力となつて居る。資本主義的組織は、舊き自由主義が信じたやうに、自由な平等な人間の共同生活の組織ではなく（一一一頁）、早代の個人的支配形式をば資本の非個人的支配形式に變じて居るに過ぎない。社會主義は、これに對して、より高い道德を代表するものである。併し、社會主義も、現在それに附着して居る暴力倫理の多くの殘滓をば拂ひ落さなければならぬ。それは、發展の連續を換言すれば生成しつつあるものと既に生成せるものととの不斷の關聯——事物の本性が既に規定するところの——を自らも破壊しないやうに努め、自己の力の及ぶ限り合法的發育の道を確保しなければならない。

マルクス主義に對しては、シュタウデンガトは、大體に於いて、シュタムラー及びナトルプよりも遙かに近づいて居る。彼はマルクスの方法とカントの方法とは、兩者とも與へられたものをば心理的に研究せずして客觀的に分析する限りに於いて、類似する、と見る。『それ故に、多くの個個の研究にはなほ改良せらるべき餘地があるにしても、マルクスの研究の原理と方法とは何ら非難せらるべき點がない。我々は、それに於いて、何らの原理的誤謬をも發見し得ず、單に補充せらるべき缺陷を發見し得るのみである（一一〇頁）。この缺陷は、マルクスが經濟の倫理に對する關係をば充分に研究して居ない、と云ふ點に存する。彼は、單に、いかなる法則が事實的に今日の國民經濟の中に働いて居るか、を示さうとして居るに止り、その正當又は不正當の基礎づけをば全く拒

否して居る。併し、これは、『不可能なる企圖』である。『マルクス主義は、それが社會的生成をば因果的見地から科學的に述べける限りに於いては、有効であり、且つ、或ひは起るべき誤謬をば絶えず科學的統一的方法によつて訂正し得る。併し、與へられたものの意識的計畫的變革を目標とするや否や、それは、このための標準をばかの因果的生成の中に發見し得なくなる。……マルクス主義は、このことを會得するや否や、それ自身の原理を整合的に述べけることによつて、カントに到達する。』目的構成の法則に對する理解は、カントの研究に基いて居るのである。而して、逆に、『目的構成の法則は事實的生活の自然法則が基礎を提供しなければ、空虚な圖式であるに止る。カント主義は、このことを明瞭に認識するや否や、彼自身の基本思想を整合的に發展せしめることによつて、マルクスに到達する。』從來の經濟的發展の法則に對する理解は、マルクスの研究に基いて居るのである（一五九頁）。

## 二、カントと社會主義

特に、カントと社會主義との關係に關しては、シュタウディングガーは、私の「カントと社會主義」(*Kant und der Sozialismus*)と題する一九〇〇年の著書に刺激せられて、これより數年後に、*Sozialische Monatshefte*<sup>32)</sup>に、同題の論文を發表して居る。彼は、そこに、次のやうに論じて居る。我々は、性

急な反對者たちが新カント主義者たちを曲解したがるやうに簡單には、カントの中から社會主義を拾ひ出し得ないが、併し、彼の自由主義的基本思想の歸結は、社會主義に導くものである。カント並びに古典的時代全體の基本傾向は、自由なる人類の思想 (der Gedanke des freien Menschentums) であつた。今日の社會主義の生活原理及び眞の内的出發點も、また、それに外ならない——たとひこれは、歴史的に直接それから由來しては居ないにしても。カントの自由主義は、經濟的なものではなく道德的なものであつた。何となれば、人間が眞に自由であり得るのは、彼が他の人間と結合して理性的に行動する時にばかりだからである。併し、このことのためには、生理的に或ひは經濟的に或ひは法律的に強い者の権利が支配する生活秩序ではなく、『一人の自由をば他人の自由と並存し得しめるところの』カント律法が支配する生活秩序が、必要である。然るに、かかる生活秩序は、平等なる権利を有する人々の自治の下に置かれて居るところの協同的<sup>33)</sup>事業に於いてのみ、可能である。換言すれば、生産手段の生活化が、『自由に自治する人間の共同體』と云ふ目標への手段なのである。カント自身は、確かに、彼が企てた道德的諸原理の變革——各個の場合に對して一定の規則を與へようとする質料的權威的諸原理から正當不正當に關する自由なる確信のみから生起する形式的自律的諸原理への——の全範圍を、未だ、見極めて居なかつた。個人に對してすらさうだつたのであるから、總體に關しては勿論である。これを認識しそれに従つて行動することが、我々

の使命なのである。

### 三、道德の經濟的基礎

シュタウディングガーは、「倫理と政治」に於いては、云はば主理主義的に、意志一般から出發し然る後に人間の具體的並びに社會的諸關係に移つて居る。而して、彼の一九〇七年の著「道德の經濟的基礎」(*Wirtschaftliche Grundlagen der Moral*)<sup>34)</sup>は、それを補充し、且つ、經濟的方面に於いて『部分的修正』(序言一頁)を加へようとして居るものである。それ故に、且つ、この書は一般には未だあまりに知られて居ないが故に、我々は、この書思想進行をば一層詳しく述べなければならぬ。

#### (a、基本關係)

方法的基礎として、シュタウディングガーは、唯物主義的歴史觀を採用する。これは、彼によれば、決して、死せる機械主義を説くものではない。何となれば經濟の基礎は技術であるが技術は單に人間の手のみならずまた人間の精神をも豫想するからであり、且つ、經濟・宗教・道德・政治は互ひに不斷の內的關聯を保つからである。『他の凡てのもの根柢に横はる』(五頁) 經濟は、文化財(Kulturgüter)を生み、文化財は宗教(即ち、『知られざるもの』への關係)を生み、宗教は道德を生む、等。『道德的なのは、意識的に人間の生活諸關係をば互ひに撞着せぬやうに形成しようとするところの行動である。』(一〇頁) 併し、道德の基本要素は、法律形成のための努力或ひは闘

争としての、政治である。從來の實際的社會史に於いては、物質的諸勢力が、目標を意識して居り共同的意志統制の下にあるところの指導をば持たずして、經濟的發展を押し進めて來た。併し、一層高い生活形成に對する大衆の理解が増し共同體關心が高まるにつれて、一の根本的變化が起り、『共同的事件に對する意識的共同體的統制』が生れるであらう。これは、エンゲルスの言葉をもつて云へば、『必然の國から自由の國への飛躍』である(七頁)。これと共に、唯物主義は、理想主義に一變するのである。

從來の社會史的發展並びに今日の社會的鬭争の本質をば一層明瞭に通觀するために、シュタウディングァーは、人間が(一)單なる自然的存在(Naturwesen)として(二)聯合體的或ひは交易的存在(Gesellschafts- oder Verkehrsweisen)として(三)共同體的存在(Gemeinschaftsweisen)として互ひに結ぶところの三つの基本關係(Grundbeziehungen)を想定し、それに従つて、彼らの間に存し得べき(一)物件的或ひは客體的關係態(Sach- oder Objectsverhältnis)(二)聯合體的關係態(Gesellschaftsverhältnis)(三)共同體的關係態(Gemeinschaftsverhältnis)の三つの基本關係態(Grundverhältnisse)を想定する。<sup>35)</sup>

純然たる客體的關係態、即ち、一切の衝動及び關心の間に於ける無拘束的鬭争は、全く除去せられることも不可能ではあるが、全くそれのみで存立することも不可能である。その特徴は、流血を

伴ふと伴はないとを問はず鬭争であり、その目標は、奸計或ひは暴力或ひは單なる威力による他人の所有或ひは人身の強奪であり、その道德は、一方に於いては主君道德であり他方に於いては奴隸道德或ひは盲從道德である。——物質的並びに精神的財の交換と競争とを原理として居る今日の交易的或ひは獲利的聯合體 (Verkehrs- oder Firverbgesellschaft) は、暴力的關係態と共同體的關係態との中間に位する聯合體的關係態の特徴を、最もよく示して居る。それは、共同的目標を持たず利得を收めることにのみ専心して、『振子道德』 (Pendelmoral) ——表面は意嚮道德を尊重するやうに見せながら實際は私利をのみ尊崇するところの——を生んで居る。その原理は、無原理、これである。——これに反して、共同體的關係態は、目標の統一・それに對する共同的關心・共働の自發・成員の權利の平等を要求する。勿論、共同體には、國家共同體や宗教共同體のやうに確固たる永續的なものもあれば、株式會社などのやうに極めて咨意的な一時的なものもある。更に、現實的共同體もあれば、これに對立する目標共同體或ひは理念共同體もある。共同體理念は、道德的基本理念である。それは、獻身、連帶感、最高の目標の下への他の一切の目的の從屬、舊い型式にではなく新しい理念に從つての行動を、生む。この際に、同じ目標を追求する者の間にも、目標に至る至當な道に關して、戰術の争ひが起ることがあり、事情によつては、自由意志による規律が必要となる。共同體の道德的基本要求は、その成員の公正・信實・勇敢・慎重である。盲從道德並びに

主君道德は、服従せしめられた者の暴力的反逆を招致するが、共同體思想は、發展——而して、道德的發展、即ち、比較して一層高い共同體に導くところのそれ——の繼續を確保する。

人間の社會は、常に、上述せられた人間の基本關係の三つを混有して居る。差異は、それらの中の何れが主となつて居るか、によつてのみ、生ずるのである。我々は、著者がそれをもつて彼の叙述に温かさや生命とを與へ得て居るところの豊富な例の中から若干を引用して我々の概説を補ふことをば、斷念しなければならなかつたが、この書の第二編に與へられて居る『從來の歴史上に現れて居る、三基本關係の混合』の描寫に立入ることは、尙更、これを斷念しなければならない。社會の發展史をばこの見地に立つて原始人群 (Horden) 及び異邦人共同體 (Gentilgemeinschaften) から『貢賦的關係態』 („Tributverhältnis“)・奴隸制度 (Sklaverei) 及び僕婢制度を (Hörigkeit) 經て『自由なる』資本主義的交易聯合體 („freie“ kapitalistische Verkehrsgesellschaft) に至り更に現代的資本獨占主義 (Kapitalmonopolismus) まで述ぶけること、而して、その際に、絶えず繰返して、それらが當時の道德觀に對して及して居る影響を見ることは、頗る興味あることではあらうが、我々の當面の問題にとつては必然的關係のないことであるが故に、我々は、直ちにこの書の最後の部分を成す『共同體の優越』に、換言すれば、社會主義に關するシュタウディングアの叙述に——尤も、ここに於いても、その主要思想を抽出するに止る——が移る。

(b、社會主義の道德)

人間をば、團結に、共同的目標追求に、暴力的關係態(封建主義)或ひは獲利的關係態(資本主義)が優越することを排して私的利益を『一般的幸福』(das „allgemeine Heil“) (ディローゲン)に從屬せしめることに、驅るものは、『水の上に漂ふ理性』などではなくて、必要である。現存するものと新たに出現する社會的共同體の理念との矛盾は、宗教的、希望的(基督教)・哲學的理論(プラト・ン・カント)・ユトピア的未來像若しくは企圖を生んで來た。而して、漸く、現代の勞働者運動は、『科學的社會主義』に於いて、實際の經濟的發展そのものに結びつくに至つたのである。

基督教は、最初は、確かに、プロレタリア的特質を明かに示して居たのであるが、併し、自己の力に頼るところなく、早くから、官憲への服従を説いた。かくて、凡て人間は悉く同朋であり神にのみ服従すべきである、この思想は、國家及び教會に於ける現存の暴力に對しての服従を、生むに至つたのである。

更に、哲學も、さうである。昔プラトンが『善の理念』を社會的玉座に据わて——尤も、彼は生ける理念力(Ideekraft)をば人爲的に案出せられた一定の理想と混同して居るが——から、初めて、カントは、その『目的の國』の思想によつて、再び新しい共同體倫理の基礎を置いた。而して、『カントの思想のこの方針に於いて教育せられたカント主義者たちが社會主義者になるのを常とするこ



とは、偶然ではない。』(八六頁) 併し、カント自身は、確かに、この彼自身の理念の起源をば、なほ、現實的生活に於いてではなく抽象的理性に於いて求めて居る。彼の斷言的命令が、云はば、『トネルが未だ穿たれて居ない山を通り抜けるやうに命せられた機關車』(八八頁)のやうに立往生して居るのは、このためにである。かくて、この立往生は、この斷言的命令を——基督敎をさうしたやうに盲従道德に適合せしめ、かくて、社會主義者の猜疑的とならしめた。なほ、カントにあつては、共同體は、各人が自己自身のため共同體の命令に従ひ行動することによつて、既に、生起する、とせられて居る。<sup>37)</sup>『自由に行動せよ!』も、また、不明瞭を含む。何となれば、いかに偉大な名人も樂器なしには演奏し得ないやうに、人間は共同體が既に存在して居なければ行動し得ないからである。同一の理由から、この批判哲學者は、その應用倫理學に於いても、なほ、彼を圍繞して居た單なる『交易的聯合體』の見解に囚はれて居る。彼の道德法則には、まさしくそれを一層有効ならしめるために、次のやうな補充的要求が附加へられなければならない——未だ共同體が汝と他人とを結合して居ない場合には、それを創造することに努めよ!(九一頁) 而も、我々の著者は、意識的に意欲する人間が目的の國に照應し自己に責任を負つて行ふところの意志決定によつて人間の行動の矛盾を排除する、と云ふ原理に於いて、カントの倫理學に於ける恒久的なものを見出し、これは一層高い共同體を追求して居るものである、と見做して居る。而して、今日に於いては他の一切の生

活關係を指導するかかる共同體は、先づ經濟の地盤に於いて、プロレタリアの社會主義によつて追  
求せられて居る(九二頁)、と、彼は云ふのである。

プロレタリアの意欲の基礎は、いかなるものであるか。社會主義は、政治的倫理的領域に於いて  
は先づ、單に、『交易的關係態』の原理の整合的實現を即ち婦人をも含む一切の人間の民主主義同  
權を求めに止るが、經濟的領域に於いては、これに反して、生産と消費との間に於ける從來の關  
係の全き變革を求め。この關係は、今や——人間それ自身もさうであるが——單に資本増殖のた  
めのみによつて立つものとなつて居るのである。今日既に存する『社會主義的』經營の例として普通に  
擧げられるもの(郵便・鐵道・瓦斯事業等)は、シユタウディングの見るところによれば、適當  
な例ではない。何となれば、これらに於いても、消費者は目的に對する手段に過ぎず、勞働者は道  
具に過ぎないからである。これらに反して、今日既に生産を自己の必要のために而して組織せられ  
た消費者の統制の下に行つて居るのは、消費組合(Konsumgenossenschaft)である。この無音の革  
命は、既に、進行しつつある。この『生き生きとした向上的發展への解放』に比すれば、資本家の大  
規模なトラストやカルテルは、實際の『革命者』である(九七頁)。而も、消費組合は、單に、社會主  
義的管理がいかにして可能であるか、を示すに止り、必ずしも、プロレタリアが意識的に何を意欲  
するかを、示して居ない(一〇〇頁)。

これを初めて示して居るのは、黨 (die Partei)——但し、これは、偶然的な諸個人に従つてではなく、實質的に、即ち、黨が持つ『プロレタリア的共同體道德』の内容に従つて、判斷せられなければならない——である(九八・九九頁)。

社會民主主義の指導者たちは、從來、理論的道德に留意する餘暇を持たず、且つ、從來の曖昧な交易道德或ひは抽象的な理性道德に對して至當な嫌壓を感じて居るが、而も、理論的道德の研究はデイーツゲンによつて始められ、その後ますます盛んに行はれて居る。<sup>85)</sup> 凡ての社會主義的倫理學者たちが最高の目標として居るものは、常に、一層高い社會的共同體の樹立である(一〇五頁)。夫々の手段は、この最高の目的から指令せられ、この最高の目的によつて『神聖化』せられるのである。而して、この場合に於ける一般的前提は、現存するものへの用意周到なる結合、大衆の間に於ける明瞭な認識の傳播、『階級闘争』に於ける防禦並びに建設のための大衆の團結であり、戦術は、個々の國々の文化状態が異なるに従つて、異り得る。

これに續く、最後の章に先づ、『兩(第二・二三)章は、本質に於いては、『交易社會』——政治的に云へば、自由主義——の道德との清算である。勞働者階級の大衆は、彼らの社會主義的立場の至當なることをば明かに認めて居ると云ふよりは寧ろ本能的に感じて居るのであるが、而も、彼らは、平均的に見て、彼等の敵たちが『善良なる市民』であるよりは遙かに大なる度合に於いて、社會主義

者である。彼らに好意を持つて居る者までが、『階級闘争』の立場を理解し得ないで居る。而して、『究極目標』の下に、プロレタリアの究極目標をではなく最終停車場 (Endstation) を、換言するならば、努力の直線を、考へて居る。併し、社會民主々義者は、公平・自由・人間の品位・祖國等の如き『交易的市民』によつて尊重せられる理念の下に、何ら確定せられたものを考へ得ない。彼は、これらが、權力を所有しつつある階級によつて、現在の状態即ち交易的社會を維持するためのみ、否、可能である場合には——地主階級が再び而して資本獨占が次第にますます前景に出つつある、今日に於いては、まさしくさうであるが——それをなほ惡化するためにのみ、利用せられることを、見る。なほ、これに加へて、法廷の判決並びに社會的判斷に於ける形式主義が存在する。要するに、勞働階級と有産者階級との間には、深い罅隙が存立して居り、後者は、今日の獨占的發展の中に於けるそれ自身の位置が惡いものであることを、大部分、未だ了解して居ないのである(一一二頁)。併し、自由と云ふ語は、何からの自由か (Freiheit wovon?)、而して、何のために自由か (Freiheit wozu?)、が、區別せられなければ、空虚な言葉である。無政府主義者 (シュタイルナー) の絶對的な自由の概念は、根柢に於いては、獲得の自由 (Erwerbsfreiheit) を一般化したものに外ならないが、社會主義の、搾取からの而して共同的勞働の結果の共同的處理のためにの自由は、それとは正反對なものである(一一〇頁)。有産者が組合制度の樹立によつて蒙る經濟的自由の損

失は、さほご甚しいものではないであらうが、彼らは、今日、既に大なる經濟的團結(カルテル等)の強制の下に服して居る。また、思想の自由は、今日の交易的社會によつては、影響がその基礎に及ばぬ程度に於いて許されて居るに止る。なほ、今日の交易的社會は、それ自身の原理に矛盾して、信仰の強制を保護することを、支配者の國家に委託して居る。人々は、ジェスイット教の『目的は手段を神聖化する』と云ふ思想をば、非難するが、彼自身がこの『ジェスイット主義』を凡ゆる領域——教會・『祖國』・利得・官僚的形式主義等の——に於いて絶えず實行して居ることには、氣づかないのである。社會主義者は、確かに、反對者に對しても、彼が自由に意見を發表する權利を持つて居ることを、認めるが併し、證明せられ得る事實の外に何らの前提をも知らずその冷靜な毫も形而上學的偏見を混へない研究の外に何らの方法をも知らない科學的、世界觀の地盤の上に人が立つことを、要求する。社會主義者の歴史的唯物主義は、ホルバツハヤビュヒナー等の形而上學的唯物主義とは無關係である。それは、形體的並びに精神的諸現象の間に於ける實際に證明せられ得る諸關聯のみ、研究しようとするものである。知的發展と實際的自由(共同體生活)とは、互ひに、他を制約する。併し、自由は、咨意を意味するものではなく、共同體——その任務のために嚴格な規律を要求するところの——による意志規定を意味するものなのである。

共同體道德と今日の支配者道德との間の鬭争は、先づ、所有の概念を中心として行はれる。死に

つつある自由交易時代の遺産を争ふものは、獨占（搾取）所有と純然たる勞働所有となのである（一三三頁）。道德の兩つの方向・兩つの種類の間には、何らの調和もあり得ない。ここには、これかかれか、『神』に従ふか『人間』に従ふか、があるばかりである。支配者階級は、今日既に例へば憲法の中に存在するところ共同體的秩序の萌芽をば、單なる裝飾として取扱ひ、自由主義は、獨立の交易人（Verkehrsmensch）にのみ、平等の權利を與へようとするが、社會主義は、一切の人々に對して、而も、經濟的にも徹底して、これを與へようとする。自由な交易的社會の古い經濟秩序は、明かに、崩壊する。その後を相續する者は、何人であるべきか、父か、子らか。この際に、支配者階級は、自身のためには絶對的支配權を他人からは絶對的服従を要求するが、勞働者階級は、一般に、その調子が平和的である。『我々は、富者に對して憎惡を説くのではない、ただ、各人のために平等の權利を説くばかりである！』後者を支配して居るのは、既に、一層高い共同體の思想そのものであり、前者を支配して居るのは、『客體』原理（„Objekt-Prinzip"）である。尤も、今日に於いては、未だ、支配者階級の權力に對する勞働者階級の道德的・政治的・經濟的闘争が、必要である。かくて、我々の著者は、最後の章『階級闘争と目標への前進』に入る。

階級闘争は、それを指導する人々の偶然的諸屬性に従つて判斷せられてはならない、自然史的過程である。この闘争は、相戦ふ兩黨派が共に識見を有する場合には、穩和な形を取ることもあるが、

併し、階級が存在する限り、全く止むことはない。然り、來るべき共同體さへも、これを單に規制するに止り、これを全く廢棄することは不可能なのである。併し、我々にあつては、未だ發展方向一般のためにの鬭争が支配して居る。従つて、『一層鋭い眼光を具へたマルクス主義者たち』が看破して居るやうに（一四七頁）、一九〇三年の大『租稅強奪』以後殊に、對立が鋭くなりつつある。爲政者は、事實に於いて、獨占主の傀儡であり、従つて、彼らの美しき言辭及び顔貌は、何の役にも立たない。小ブルジョア階級は、未だ、甚しく停滯して居り小膽である。人々は、社會民主黨の『獨暴な』本質を非難するが、併し、人々は、屢々、これを不正と苛酷とによつて挑發して居る。いかなる運動も、『社會主義のそれぐらゐに、合法・公明・平靜に依存して居るものはなく、粗野な暴力を慎んで居るものはない』（一五三頁）。著しく平和的な意義を有するのは、就中、國會議員選舉權の保持及び擴張である。社會主義の實行は、確かに、結局に於いては、權力（暴力ではない）の問題であらう。事物の發展は、初めは、なほ、大なる獨占者の資本の權力を増進し且つ恐らく彼らの一時の勝利を現出するであらうが、併し同時に、また、社會的反對權力をもますます惹起するであらう。來るべき共同體秩序に存する實際的困難は、確かに、大なるものではあるが、併し、道徳的な動機と一層深い認識とによつて克服せられ得るものである。殊に、教育が社會的共同體から成長するに至つた時、凡ての人間にとつて『學校が常に生活であり生活が同時に學校である』に至つた時には、

さうである（一五九頁）。かくて、シュタウディングァーは、次のやうに結論する。第一步は、『獨占專政主義の倒壞及び民主々義的秩序の樹立』でなければならず、第二步は、『勞働の社會的體制の構成であり、これは、目的に役立つ限りに於いて共同的に形づくらるべきである。』併し、最後の目標は、いつまでも、理想に止つて居るであらう。我々は、古きものの没落の後に、『認識に導かれる共同體生活の自己規定によつて可能となるところの、強い感情と生き生きとした意志とを有する人格の發展の、無限の目標への不斷の進歩』のために、餘地が生じたことをもつて、満足しなければならぬ（一六六頁）、と。

#### 四、政治の文化的基礎

彼の最後の十五年（一九〇六年頃から一九二一年一月に於ける彼の死に至るまでの）を、シュタウディングァーは、主として、消費組合（Konsumgenossenschaft）に關する思想の實際的並びに理論的普及に、献けた。彼は、この消費組合の革命的（grundstürzend）意味をば、一九〇七年の著書に於いて初めて指摘し、その後、多くの小さな著作及び論文殊にトイブナーの叢書「自然及び精神界から」（*Aus Natur und Geisteswelt*）の中の一篇たる總括的論文「消費組合」に於いて論述して居るが、彼は、これをもつて、効驗の確實な社會的治療手段——我々は、殆ど、さう云ひ得るであらう



——と見做して居たのである。

併し、彼の最も美しい最も直觀的な最も生き生きとした著作は、世界戦争が勃發する少く以前にイエナのオイゲン・ディードリクスから出版せられた、從つて、恐らく、それに相當するほどには有名になつて居ない、「政治の文化的基礎」(*Kulturgrundlagen der Politik*, Jena 1914, 194 u. 250S.) (上卷、出發點及び方法、下卷、原因及び目標)である。これは、彼の最後の而して最も成熟せる著書であり彼は、これの中に、また、彼の哲學的・倫理的・政治的世界觀の全體をば、而も、何れの思索する人々にも理解せられるやうな生活から迸り出た形體に於いて、表現して居る。何れの言句の背後にも、何を意欲すべきかを知つて居るところの、而して、同時に、カントの理性批判やマルクスの資本論の如き至難な問題をば驚嘆に價する明瞭さを以つて説明する術を解して居るところの、固く基礎づけられて居る人格が、窺知せられる。或る章は、歴史書の優れた一部のやうに、また、或る章は、生氣躍々たる自叙傳のそのやうに、讀まれる。更に、なほ、生活からの適切な類例、現實からの人をして感動せしめなければ止まない譬喩、並びに基本目標が眞摯であるにも拘らず屢屢野趣を帯びた諧謔や機智に富む諷刺を交へて居るところの殆ど常に通俗的な言辭が、ある。併し、我々は、ここでは、哲學に關係ある事項のみを取出して、そのみを問題とするに止らなければならぬ。

この書の本質的部分は、シュタウディングガーを既に知つて居る我々の讀者に對しては、云ふまでもなく、何ら内容的に新しいものをば與へず、單に、彼の基本思想の新しい表現とそれの最も重要な點の強調とを與へるのみである。即ち、彼によれば、我々の時代の基本缺陷は、關聯(上卷六三頁)及び關聯の調和或ひは合致(六九頁)の缺乏である。かくて、彼は、これを實現するために、先づ、主としてカントに依據して——彼は、未だ、この自稱認識論的主觀主義に充分に習熟して居ないのであるけれども——『思考方法』を研究する。次に彼は、意志の基礎及び方法を研究する。前者は、衝動・概念・理念・目的・慣習に於いて見出され、後者は、社會的意志關係に於いて見出される、と云ふのである。次いで、彼は、マルクスに自由に依據しつつ、頗る彫塑的な且つ生氣に溢れて居る歴史的實例に就いて、『社會有機體的發展』をば、生産關係・道德的法律的宗教的上層建築・藝術的科學的上層形體に於けるその歴史的作用性に於いて、闡明する。彼は、なほ、兩性關係及び家族關係の發展並びにそれ以上の體制的發展可能性に就いても、叙述して居る。而して、シュタウディングガーによれば、我々の今日の生活を支配して居るところの意志關聯に對する認識を缺くならば、我々の全努力は、偶然の結果を收めるに止る暗中摸索を出でないけれども、併し、マルクスによつて開拓せられた、これらに關する認識も、今日の狀態に於いては、未だ、不充分なのである

(上卷の結論、一九二頁)。

かくて、下卷の前半(第三篇)は、『近代の文化的基礎』を展開して居る。即ち、今日の社會的意志關係の基礎たる交換關係態(Tauschverhältnis)が、自由取引及び『自由的』産業主義——並びに、それの種々なる政黨に於ける上層形體——から、『利潤産業主義』及びその結果たる新しい社會的依存——並びに、それらが諸政黨殊に自由黨及び當時の社會民主黨の諸方針(修正派・急進派)に對して及ぼして居る影響に於ける現在の様相に達するまでに、經て居る、歴史的發展をば叙述して居るのである。而して、彼に従へば、單に政治的手段によるのみでは、望まれる新しい世界は成就せられ得ない。勞働と市民(Mitteln)とは、顯著な經濟的權力手段によつてのみ、大資産に向つて對抗し得る。『經濟的發展に於いて産出せられたのではないどころのものは、政治的外形』——例へば、社會的革命的——『に於いても、勝利を收め得ない。』(九九頁) 『經濟を支配することによつてのみ、國家權力と云ふ權力手段は左右せられ得る』と、R・ヒルファアディングは、彼の「金融資本論」の中に、至當に、但し、それから抽出さるべき政治的結論をば抽出さずに、述べて居る(九九頁)。文化は、抽象的なものからではなく、我々の日常の經濟から、成長する。『我々人間が我々のパンや野菜や砂糖や珈琲や衣服や住居を調達することに於いて互ひに關係する、その様式は、我々が法律的に道德的に宗教的に互ひに關係する且つ關係し得る、その様式をも、包含して居るのである。』(一一七頁)「これは、マルクスの基本命題の新しい表現に外ならない。」

『文化的基礎』に次いで、新しい『文化的課題』が、論せられて居る。それを論じて居るのが、最後の第四編である。資本貴族 (Kapitalmagaten) の獨占によつて起る野蠻時代への復歸から我々を救済すべき、唯一の可能をば、シュタウディングガーは、大衆による經濟的權力の奪取、經濟的自治即ち並遍的な購買者の消費組合の設立に於いて、認める。これは、彼によれば、マルクス主義並びに整合的な自由主義の結論であり、同時に、眞の宗教及び道德の結論である。而して、ここに問題となるのは、まさしく、これまで諸民族の歴史に於いて絶えず互ひに或ひは交叉し、或ひは纏絡して居るところの四つの關係能——鬭争・交換・支配・共同體の各關係態——の中で、最後のものが、結局に於いて、單純な理性に従つて、勝利を占めるか、否か、と云ふことなのである。消費組合思想に關する個々の諸問題に就いてシュタウディングガーが論述して居る多くの事柄は、ここでは、我々の問題の外に屬するが、併し、彼は、この思想が現代の一切の公的問題即ち宗教・道德・祖國思想・教育・婦人問題・選舉權・國有・自助・平和運動・軍備と關聯することを。詳説して居る。彼の主要思想の價值如何に關して意見を有せられる人々は、彼に對して議論せられるがいい。それは、何れともあれ、この彼の最後の名著も、また、カントの方法とマルクス的方法との結合を代表して居るものである。従つて、それは、たとひ、これら兩方法の間に『一切を整理するために』、シュタウディングガー自身(上卷九六頁)が彼の理想主義的樂天主義の性急さに於いて考へて居るやうに『單

に二三の些小な事項が附加せられるのみ』では、足りない、としても、ここに所屬するのである。

かくて、シュタウディングァーは、これまでに擧げられた新批判主義の代表者たちの中では彼は、個々の理論に於いては相異して居るところを持つて居るにしても、彼の方法の故に、明かに、これら代表者の中に數へらるべきである——マルクス主義と批判主義との結合の可能を最も明かに云ひ表して居る人物、否、この結合の理論的並びに實際的必要を最も強く力説して居る人物である。

終りに、私は、ここに、私自身の（本書の序言の中に擧げられて居る）諸論文——舊カント主義者並びに舊マルクス主義者の双方から劇しい批評を惹起しさへして居るところの——を指示することを、許されるであらう。あの中で、最初の兩論文は、その外形に於いては、歴史的考察を主としたもののやうに見ゆるかも知れないが、深く洞察する人々は、これらの中に、既に、「マルクスとカント」と題する私のウィーンに於ける講演が明述したところの而して私の後の諸勞作の基礎となつて居るところの體系的核心を、認められるであらう。<sup>39)</sup>

## 六、結 語

狹義に於ける新批判主義的社會哲學の叙述は、これぐらゐにして置いていいであらう。何となれば、コーヘンが既に一八九六年にそれに就いて語つて居るところの、社會的意識の『巨大なる進歩』は、今日なほますます増加しつつある社會主義的文獻に於いても、認められないわけではないが、これら無數の論究は、カントの批判的方法とは沒交渉だからである。<sup>40)</sup>

併し、その中で第一に注意せらるべきは、心理學者及び美學者として一層有名なミュンヘンの哲學者テオドル・リップスの民衆大學に於ける講演から生れた著書『倫理學の諸基本問題』(Die ethischen Grundfragen, Leipzig, 1899, 308S.)であらう。彼は、明かに、カントの形式的倫理學から彼の社會的諸原理及び、諸要求を導き出して居る。『何人も、……同時に奉仕者となることなくしては、即ち、絶對的道德的目的——それは奉仕者自身の中に存するにしても——の奉仕者となることなくしては、道德的權利によつて支配者となることができない。而して、凡ての奉仕者は、同時に、支配者、即ち、道德的目的全體と自己の道德的生活目的とを意識せる人格であるべきである。これ以外の凡ての支配及び凡ての奉仕は、不道德的である。』(一五七頁) 道德法は云ふ、可能なる一切の人間的目的を持って、而して、一切の場合に且つ一切の人間に妥當するところの秩序をそれらの間に設立せよ、と(一五九頁)。リップスは(テオバルト・ツイーグラと共に)、社會問題をば、道德問題と解釋して居る(一九〇頁)が、これは、同時に——シタウティンガの言葉を以つて云へば——『道

徳問題は社會問題である』<sup>41)</sup>ことをば意識して居ながらのことである。人間は、先づ、生きなければならぬ。併し、人間は、また人間として生き、自己を勞働奴隸としてではなく道德的自己目的として立證し且つ感すべきである(一八九・一九〇頁)。それ故に、階級の權利・特典たる權利は、道德的な人間の權利と變らなければならぬ(二三三頁)。凡ゆる國家秩序の最後の目標、は人間の全き道德的法律秩序、即ち、完全な道德的有機體(二三七頁)、道德的人類の國、『地上に於ける神の國』(二三八頁)である。現存の財産秩序及び國家組織は、それらが道德的に合目的々である間のみ、換言すれば、國家の道德的究意目的たる強い豊富な自由な人格の實現をば他のものよりも多く促進する』間のみ、不可侵的なのである(二三五頁)。もし、我々が、それらが最早さうでないことを確信する場合には、我々は、『各自がその持場に於いてこの現存の社會的國家的秩序の基礎を改建することに協力すべき』義務を持つであらう(同處)。「道德的正當防衛」としての革命は、義務、極めて神聖なる義務であり得る。かなる民衆も、自己を道德的に破滅せしむべき權利を持たない。……人類の道德的向上は、最高の律法であり絶對の權利である。』(二三九頁)。

明敏なる社會學者フェルデナント・トエンニースも、倫理的には、我々の側に立つて居るが、哲學的方法的には、少しく異つた立場——それを、私は、他の箇處に於いて、簡單に特質づけようと試みて居る——に立つて居る。同じく、L・ネルソン(ゴエッティンゲンの)最近の諸種の社會倫

理學的勞作も、究極に於いては、批判主義と關聯して居るであらうが、直接には、それと關聯して居ない。<sup>41)</sup>

終りに、上述の社會化的『新カント主義者』(die sozialisierenden „Neukantianer“<sup>42)</sup>)の諸著が社會主義或ひはマルクス主義の理論家に對していかなる影響を及して居るか、と云へば、それは、外觀を一見したところでは極めて微弱なものであるやうに思はれる。それら諸著が社會主義の雜誌に於いて詳細に批評せられた——コーヘンの書がD・コイゲンにより *Dokument des Sozialismus*<sup>43)</sup> に於いて然せられたやうに——ことは、甚だ稀である。例へば、カウツキは、「倫理學と唯物主義的歴史觀」(*Ethik und materialistische Geschichtsauffassung*)の中で、彼がコーヘンの近著「純粹意志の倫理學」をば知つて居ることを示しては居るが、併し、彼は、全然、このマルブルクの哲學者の所論をその全體に於いて検討しようとはせず、單に、カントの斷言的命令は『世界史の新時代並びに全將來の道德的プログラムを』包含する、と云ふ句を嘲弄的に註釋して居るのみである。<sup>44)</sup> ナトルブのペスタロッチに關する最初の小著は、確かに、A・ベーベルにより *Neue Zeit* に於いて好意を以つて批評せられて居るが、併し、それ以後、このドイツ社會民主黨の學問的機關誌は——私の最初の著作がその出現の動因となつたメイリンクの兩論説を(本書第六章參照)除けば——この重要な社會哲學者にして社會教育學者たる人物に對して、何らの注意をも拂つて居ない。シュタムラー及びシュタウ



ディンガーの著作に關しても、事態は、やや少しくいいに止る。かくて、我々は、コーヘンが、彼の「倫理學」の第二版の序言(二三頁)に於いて、自分の『精神的深化と倫理的嚴密及び體系的明瞭に於ける將來の成熟とに對する確信は不動である』けれども、『社會主義の文献がこの書に對して示すべき善の洞見をば缺いて居る』ことは遺憾である、と痛嘆して居る所以を、了解する。而して、ナトルプも、また、輓近の社會主義が『惜むらくはカントを指すことをば怠つて居る』のを、歎いて居るのである(本書に於けるナトルプに關する箇處の『三』を参照せられよ)。

我々は、これらの思想家たちが明確に社會主義を支持して居ることを見て來たのであるが、而もかかるまことに奇怪な事實が存することは、いかに説明せらるべきであらうか。これは、先づ、社會民主主義の理論家の殆ど凡てが同時に政治的鬭争に忙殺せられて居ること、且つ、彼らの多くは經濟學或ひは社會史に精通することを主とし哲學には精神して居ないことに、よる。次に、これは、『有産者』から生れて居る一切のものに對しての周知の不信賴——この不信賴の當否には、我々はこのここでは、深入りすることを欲しないが——による。更に、これは、少くともコーヘンの著書はかなり浩瀚なものであり哲學專攻の學者にとつてさへ必ずしも理解し易くはない言葉をもつて書かれて居ること、而して、上述のやうに主として經濟學的に或ひは歴史學的・政治學的に教育せられて居り興味を持つて居る社會民主主義の著者たちはコーヘンに於いてもナトルプに於いてもまた幾分は

シュタムラーに於いても自己の得意とする經濟學的歴史學的然り發展史的考察法が一般に詳細に取扱はれて居ないのに失望を感じることも、よる。彼らは、屢々微細な點にまで亘る認識論的或ひは倫理學的分析的研究をば、何ら實際的價值を持たぬ論理的穿鑿と見る。彼らは、經濟的諸形式の分析も（經濟學的）『教養を持たぬ者』には『單に詭辯を弄して居るやうに見わふものである』<sup>47)</sup>、と云ふ、マルクスの言葉を、忘れて居るのである。併し、シュタムディングガーのものや私のもののやうに、批判主義的思考法を會得して居ない者にも容易に理解せられる數篇の小さい著書及び論文は、より直接的な影響を及して居るやうに思はれる。

併し、思想豊かな哲學的著作の興へる印象は、必ずしも、何れの人々によつても認められるやうに表面に現れるものではない。右に述べられた凡てのことにも拘らずカントの方法が社會主義の中に、いかに深く影響を及して居るか、を、最もよく立證するのは、その反對者の中の恐らく最も重要な一人の言葉である。彼は、自分は、『カント倫理學が我々の同志の間に獲て居る大なる勢力を排して、自分の解釋するところによれば唯物主義的歴史觀と倫理學との間に存するところの關係をば明かにすること』を、『緊急不可缺と』考へる、と云ひ、かくて、我々が後に論ずる一書を特に執筆して居るのである。<sup>48)</sup> 輒近の社會主義の種々なる理論的方針——『修正派』並びに『急進派』の——に於いてカントが換言すれば新批判主義が最近三十年間にいかに強い影響を及して居るか、を、我

々は、次の兩章に於いて述べつけようと思ふ。(この譯稿は、これで、一應完結する。)

註

- 31 なほ、彼の初期の著書 *Das Sittengesetz*, 2. Aufl., Berlin 1897 及び多くの小論文をも、参照せられよ。
- 32 Jahrgang 1904, Bd. I (Februarhft), S. 103—114.
- 33 かかる同業組合理想に到達するための階梯をば、Staudinger は消息組合に於いて認めた。而して、彼は、この消費組合のために、死(一九二一年)に至るまで、口を以つてまた筆を以つて、理論的に並びに實際的に、働いたのである。
- 34 Dornstadt, E. Roether, 1907, IIIu. 160 Seiten.
- 35 Natarp が活動を經濟的・統一的・陶冶的に三分して居るのに、類似しては居るが、決して同一ではない。『共同体』(„Gemeinschaft“)と『聯合體』(„Gesellschaft“)との區別に關しては、Staudinger 自身(a. a. O., S. 4) Tünnies の有名な問題の著書に據つて居ることを、告由して居る。
- 36 かく四つに分けることは、ただ、Platon の主徳を想起せしめるばかりでなく、また、Cohen 及び Natarp の類似の所論(上述参照)をも想起せしめる。併し、Staudinger は、Narp のやうに Besonnenheit を innere Reinheit 或は selbigen Mass der Seele と同視することをば、しなす。これは、共同體の基本要求ではあり得なから、と云ふのである。
- 37 Staudinger は、Natarp とは反對に、かう判斷して居る(上述参照)。
- 38 我々は、この次にある、Dietzgen の道德觀の主要思想に對する分析には、觸れないで置く。何となれば、我々自身、それを本書中の他の箇處に於いて行ふからである。
- 39 Staudinger も、社會主義と倫理學とに關する最近の議論のために、私の諸勞作を指示して居る。
- 40 例へば、社會主義者たちとのついで興味ある Anton Menger の兩著 *Neue Staatslehre* (2. Aufl., 1901) 及び *Neue Sittenlehre* (Jena 1905) 等、を挙げらるゝ。これらは、彼の法律觀を基礎として社會主義的法律體系及び道德體系の輪廓を畫かうとして居るのであり、従つて、『法律學者の社會主義』(„Juristen-Sozialismus“)と稱せられて居るのも、不當ではない。彼が Kant に言及し

て居る場合は、論難のためである。『社會的權力關係に適應する』者は、凡て、道德的である (*Neue Sittenlehre*, S. 3) とせられて居る。——これよりも後に、Rudolf Goldscheid (Wien) は、彼の數々の著述に於いて、『社會主義の『發展的經濟的』(,entwicklung-ökonomisch) 確立を、試みて居る。併し、これは、とらふに於て Kant に一致して居るに過ぎない。——今日、多くの文化國に於いて、殊に、ドイツに於いては一九一八年の十一月(革命第七章を参照せられよ)以來、増加して居る。社會主義を宗教的倫理的に基礎づけようとする企圖も、極めて興味あるものではあるが、方法的には、ここに關聯を持たないものである。(以前の企圖に就ては、私が *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, XXX, 2, März 1910, S. 455—514 に發表した詳細な論文 *Sozialdemokratische Pionier* を参照せられよ。)

41 Staudinger 及び Nietzsche の *Philosophische Monatshefte* (herausg. von Natorp), XXIX(1893), S. 30—50 und 198—219 に發表して居る論文を、参照せられよ。なほ、美しき文體を以て Nietzsche の形式に倣つて書かれた居る、Staudinger の *Sprüche der Freiheit*, Darmstadt 1909 を参照せられよ。

42 K. Vorländer, *Geschichte der Philosophie*, Bd. II, S. 483f.

43 Tonnes 及び *Archiv für Sozialwissenschaft* XXIX, 3, S. 895ff. に發表して居る、私に關する論議を、参照せられよ。

44 Nelson に就ては、本書第七章を参照せられよ。

45 Bd. IV, S. 172—177.

46 A. a. O., S. 35. なほ、*Neue Zeit*, XXIV, 2, S. 525f. を参照せられよ。

47 Marx, Vorwort Zu *Kapital* Bd. I (I. Aufl.), S. 4.

48 Kautsky, *Ethik und materialistische Geschichtsauffassung*, Vorwort, S. VII.